

論 文

大学教育における日本語表現指導について

A Study on Practical Japanese Literacy Education

渦巻 恵

Megumi UZUMAKI

Key words : 教材の評価, 語彙力 (語彙・表記), 構成力 (統語レベル), 構築力 (内容・情報)

1 はじめに

大学教育における文章表現科目の導入率は95.6% (2007年・国立教育政策研究所)である。しかしながら、何をどう教えるかは教員の裁量に任され、手紙やビジネス文書の作成から、論理的思考を重視することを目的とするものまで、幅広い指導が実施されているのが現状である。また、学生のニーズも、就職試験用のエントリーシートや作文の指導を望むもの、創作に意欲を持つものなど、さまざまである。

文部科学省高等教育学校課程の「国語・国語総合」の学習指導要領、「書くこと」の新領域においては、「国語の学習への「関心・意欲・態度」を高める指導を充実すること、論理的思考力を育成する指導を充実すること、表現に着目する力を育成する指導を充実すること、社会人として必要とされる言語能力の基礎を育成する指導を充実すること」がねらいとされている。

そこで、あらためて「文章表現」の教材や指導法について検討し、今後の課題を明らかにしたい。

2 大学における文章表現科目の必要性

近年、情報機器の利用により、漢字力の低下や、文章のコピーペーストが問題となってきている。また、読書習慣のない学生が増加し続けるなかで、まとまった文章を読み、要約することを苦手とする学生が多くみられることも夙に指摘されている。

文章表現の科目は、初年次教育として位置付けられる

ため、まずは、文章作成における基礎的な知識の確認が必要となる。

大島弥生「大学生の文章に見る問題点の分類と文章表現能力育成の指標づくりの試みーライティングのプロセスにおける協働学習の活用へむけて」<sup>2)</sup>は、学生の文章作成における問題点を次のように分析する (具体例は一部省略)。

A 語彙力 (語彙・表記)

A-1 語選択の誤用 (例)「困難な影響を考慮しても…手段を講じるべきである。」

A-2 語の位相の不適切さ (例)「それなのに」「こういうわけで」

A-3 文章表現の不適切さ (例)「…を導入しないべきか。」

A-4 漢字の誤用 (例)「以外に多い。」

A-5 表記のルール違反

B 構成力 (統語レベル)

B-1 主述・呼応のねじれ (例)「…の課題は、…している。」

B-2 名詞句化の不適切 (例)「…の減少、…が変わること」←並列される語の品詞が揃っていない。

B-3 修飾関係の不明瞭さ 意味が複数にとれる長い文になる。

B-4 項・要素の不足 文の動作主や対象が省かれてしまう。

B-5 不必要に長い文の繰り返し

B-6 読点のルール違反

C 構成力 (文章談話レベル)

C-1 パラグラフの不備 ①話題の混在 ②主張と根拠の不備 ③中心文の不備

C-2 メタ言語の不使用 「次に…について述べる」といった談話標識がなく、情報をただ羅列してしまう。

D 構築力 (内容・情報)

D-1 引用の不適切さ

D-2 情報検索の不足

E 公的伝達としての問題 見出しや小見出しの欠落など

大学の授業で扱うべき教材は、上の分析のAからDということになる。

文部科学省中央教育審議会、教育課程部会国語専門部会のワーキンググループによるとりまとめ (2016年) には、物事を多面的・多角的に吟味し見定めていく力 (いわゆる「クリティカル・シンキング」) や、情報活用能力、質問する力、メモを取る力、要約する力を培うことが課題として挙げられている。

大学の文章表現の授業において目指すべき目標は、上記のA・B分野に相当する語彙力 (語彙・表記)、構成力 (統語レベル) の修得でなく、C・D分野の構成力 (統語レベル)、構築力 (内容・情報) の養成ということになる。では、どのような教材を用い、どのような授業構成にするのが適当であろうか。

### 3 学生の実態とニーズ

学生の文章表現における問題点を把握するために、本学における「文章表現法」の授業の1回目 (2017/4/18) において、次の課題を課し、問題となる表現を抽出した。

教材：読売新聞コラム記事「大阪万博誘致 カジノで輝く未来は描けるか」(2017/4/13) (コラムの段落を削除して配付)

課題：

- 1 段落に分けてみよう。
- 2 内容を要約しよう。
- 3 大阪万博開催のメリットとデメリットについて考えよう。

万博は何のために開かれるのか？ 開催地にどのよ

うなメリットがあるか？ 経済効果は？ インフラ整備は？ 技術開発の進展は？ 宣伝効果は？ 教育効果は？ 開催地にどのようなデメリットがあるか？ 防犯対策は？

問題となる表現例：

A 語彙力 (語彙・表記)

A-1 「カジノはいただけない」

A-2 「それこそ悪い意味で」「いくら現実味を帯びてくるだろう」「下手をすると」「どうかと思う」

A-3 「政府はアピール活動を行ってしかない」「先に見送るべきだ」

A-4 「親善→信善」

A-5 段落の一字下げがない。

B 構成力 (統語レベル)

B-1 「記事は…決定した」「日本の情報を海外に発信することで財源の確保につながるのだ」

B-4 「資金調達の間などもっとはつきりしなければいけないと思う」

B-5 不必要に長い文の繰り返し

B-6 読点のルール違反 句読点の付け忘れ

C 構成力 (文章談話レベル)

C-1 パラグラフの不備 主張と根拠の不備

D 構築力 (内容・情報)

D-2 情報検索の不足

教材とした大阪万博誘致については、マスコミで特に大きくとり上げられることのないニュースであったため、論を立て、意見を述べるC・D相当部分についての記述は不十分であった。また、A・Bの言語知識における問題点が多く認められた。

そこで、2回目の授業に、次の課題を用意した。なお、問題文は学生の解答を改変したものである。

次の文章をわかりやすく直してみよう (テーマ大阪万博誘致について)。

- 1 日本の情報を海外に発信することで、財源の確保につながるのだ。
- 2 万博の開催は先に見送るほうがより充実した成果を上げることができると思う。
- 3 したがって、私は日本の経済が回復することを願って、万博を開催することを決めたことに賛同してみた

いと思う。

- 4 政府は、2025年に大阪に万博を誘致することを決めたが、開催するにあたって、意義やメリットを丁寧にする必要があると、記事には指摘されている。
- 5 新聞記事によると、政府は、2025年に大阪に万博を誘致することを決め、持続可能な社会システムや健やかな生き方が実感できる博覧会を目指す。
- 6 新聞記事に、「政府は、2025年に大阪に万博を誘致することを決め、持続可能な社会システムや健やかな生き方が実感できる博覧会を目指す。」と書いている。
- 7 確かに経済効果や日本の技術を宣伝できるメリットがあるだろう。
- 8 他にもさまざまなメリットがあるはずだから、国全体で前向きに考えていくべきだと思う。

主語と述語の対応や、語順の整備、用語の選び方など、Bの統語レベルについての出題である。1以外については、問題点を見つけられない学生がおり、また、変だと思うがどう直せばよいかわからないという反応もあった。

7は、「経済効果や日本の技術を宣伝できるメリットがある」を「経済効果を見込むことができ、日本の技術を宣伝できるメリットがある」とするのが正解だが、正しく書き直した答えは2枚。正答率は12.5%である。8は、論文の文体に関する問題である。抽象的な論の結び方は避けるべきであるが、「あるはずだから」「国全体で」「前向きに考え」といった表現について違和感を指摘する答えはなかった。論の立て方や結論の書き方がわからないために、例文の欠点が理解できないのである。

やはりA語彙力（語彙・表記）・B構成力（統語レベル）を中心とした演習がおろそかにはできないということになる。

こうした学生の文章力の実態とニーズを取り入れて、どのような教材を選定すべきであろうか。

#### 4 教材の検討

そこで、文章表現の教材を、その内容にしたがって分類し、特徴を整理した。なお、取り上げた教材は稿者が入手または閲覧したものに限る。

##### ①A 語彙力（語彙・表記） B構成力（統語レベル）

- ・米田明美ほか「大学生のための日本語表現実践ノート改訂版」風間書房 2012年3月（3刷）  
慣用句や文の構造、敬語、手紙文、ビジネス文書、エントリーシートの書き方など、書くことの基本をワー

ク形式で学ばせる。論作文については、テーマ型、課題文型、資料分析型の問題を載せる。

- ・清水明美ほか「Practical日本語 文章表現編—成功する型—」おうふう 2004年12月（初版5刷）  
常体と敬体の統一、句読点の付け方、履歴書やエントリーシート、ビジネス文書、手紙の書き方など、主にA語彙力（語彙・表記）に相当。
- ・木下長宏「大学生のためのレポート・小論文の書きかた」明石書店 2002年10月（5刷）  
表紙の書き方、原稿用紙の使い方、句読点のつけ方など、ごく基本的な書き方のルールを説明したもの。
- ・伊藤善隆ほか「日本語リテラシー」新典社 2010年5月（2刷）  
自己紹介、電話対応、ストレスのない文、メールや手紙の基本、履歴書やエントリーシートの常識など、主にA語彙力（語彙・表記）に相当。
- ・阿部敏久「文章力の基本」日本実業出版社 2012年2月（27刷）、「文章力の基本の基本」日本実業出版社 2015年9月（初版）  
助詞の使い方、他動詞と自動詞の使い方、文のねじれなど、誤用例を豊富にとり上げて、正しい文章の書き方を学べる教材。
- ・小泉十三ほか「頭がいい人の文章の書き方」河出書房新社 2011年4月（19刷）  
「NGな文章」と「頭のいい文章」を比較し、具体的な文章の書き方のノウハウを示す。
- ・加納寛子「チャートで組み立てるレポート作成法」丸善株式会社 2012年4月（1刷）  
骨子チャートの作成（フィールドワーク型）や、質問紙法、SD法などの調査の方法、データ処理の方法など、実験や調査に基づくレポートの作成法をまとめたもの。

##### ②C 構成力（文章談話レベル）

- ・樋口裕一「やさしい文章術」中公新書ラクレ 2007年6月（5版）、「ブレない小論文の書き方」教学社 2015年1月（1刷）  
小論文やレポートの型を示し、その構成に従って具体的に論じることで、文章力を身につけさせるもの。論文にふさわしい表現や題材の選び方を示す。
- ・慶應義塾大学教養研究センター監修「アカデミック・スキルズ 学生による学生のためのダメレポート脱出法」慶應義塾大学出版会 2017年1月（4刷）  
客観的な書き方、アウトラインの作り方、文献の探し方と引用の方法、質的データでの論証などを具体的に

示す。

- ・桑田てるみ編『学生のレポート・論文作成トレーニング スキルを学ぶ21のワーク』実教出版 2013年9月(1刷)

文献の集め方や要約演習に加え、さまざまな思考パターンを示して、論文構成の手立てを具体的に示す。

- ・渡辺哲司『大学への文章学』日本図書センター 2013年5月(1刷)

レポートや小論文は、大学の先生とコミュニケーションをとるうえで大事な事柄のまとめであるという考えに基づき、読者として友人を想定し「友人の目」で自分の文章を客観的に点検することを奨める。また、教える立場としては、レポート評価の基準を学生に明確に示すことで、「書けない」学生の苦手意識を払拭することができるとする。

- ・小阪修平『考える力がつく「論文」の書き方』大和書房 2003年1月

題材を整理させるために「テーマ表」を用いる。中心に核となるテーマを置き、周辺に大テーマを配する。そのうえでテーマ同士を関連付けて問題点を見出させ、構成を考えさせるという手法。答案例を複数上げ、問題点を指摘し、わかりやすく解説する。

- ・新茂之ほか『做うことから学ぶことへーレポート作成の技法』(株)みらい 2007年6月

まずは、「做う」ことがだいじであるということから、名文をそのまま複写させる。次に大事なところに線を引き、そこを中心に内容を15行に要約させ、さらにそれを5行に縮めさせる。序論→すると→本論→だから→結論 という論の展開についても字数を意識させて練習させる。そうした作業に慣れることが文章上達の極意であるとする。

### ③D 構築力(内容・情報)

- ・佐藤嗣男ほか『日本語表現ガイダンス』おうふう 2013年4月(新編10刷)

事実と意見の書き分け、テーマや材料の選定、構成の基本と応用、論理の立て方、情報機器の利用など、システムティックにまとめられた教材。主題→展開→まとめ 展開→主題→まとめ の演習問題や、主題・論旨、独創性、題材、構成・段落、語句・表記というチェック項目のわかりやすさが評価できる。

- ・居駒永幸ほか『レポート論文のStart Line』おうふう 2012年10月(1刷)

仮説推論・帰納推論・演繹推論の演習など、ロジック

の立て方を学べる。自説と対立する主張への批判を含む論の書き方や、批判と反論の違いなど、ものの考え方、論じ方を中心にした教材。

- ・速水博司『大学生のための文章表現入門』蒼丘書林 2014年4月(13刷)

推論的論法、例証的論法、比喩的論法、記号的論法や帰納的推論、演繹的推論、弁証法的推論、類推法など論文を書く際の考え方について、文例を挙げながら示す。演習問題や文例に幅広い題材を用いているため、教材として、飽きさせない工夫がある。

- ・河野哲也『レポート・論文の書き方入門』慶應義塾大学出版会 2002年12月3版(1刷)

テキスト批評は、テキストを批判的に検討する能力を養うと同時に、テーマが自由な論文を書くためのよい準備や練習になるという考えに基づき、(1) 目的の提示(5-10行ほど) (2) 要約(全体の30-40%ほど) (3) 問題の提起(全体の10-20%ほど) (4) 議論(全体の30-40%ほど) (5) まとめ(全体の10-20%ほど) という型を示して、論じ方のスタイルを学ばせる。

- ・井下千以子『思考を鍛えるレポート・論文作成法』慶應義塾大学出版会 2013年2月(1刷)

- ① 近年、\_\_\_\_\_が問題となっている。
- ② \_\_\_\_\_(2012)の調査によって、\_\_\_\_\_が明らかになった。その原因は、\_\_\_\_\_とされている。
- ③ しかし、\_\_\_\_\_についてはあきらかにされていない。
- ④ なぜ、\_\_\_\_\_は、\_\_\_\_\_だろうか。\_\_\_\_\_に問題があるのではないか。
- ⑤ そこで、本研究では、\_\_\_\_\_を明らかにすることを目的とした。
- ⑥ \_\_\_\_\_をすることによって、\_\_\_\_\_を検討する。などの穴埋めを使って論理を整理させるもの。

- ・西川真理子ほか『アカデミック・ライティングの基礎—資料を活用して論理的な文章を書く—』見洋書房 2017年4月(1刷)

テーマと題材をどのように整理して論じるか、グルーピングからラベル付けの演習をもとに、「比較・対比」「関連性(影響関係・因果関係・論理的順序)」「信憑性」という項目別にチェックさせる。ピアレスポンスシートを用いて学生相互に文章チェックを行わせる。

④範例に学ぶ

- ・萩野貞樹『範例による文章表現』双文社出版 1998年3月(4刷)

石川淳, 堀口大樹, 幸田露伴などの文章を分析し, 文の構造を真似て書く練習をする。さらに小林秀雄, 森鷗外, 三島由紀夫などの名文を範例として読解し, 文章力の向上をはかるといふもの。

- ・木下長宏『「名文」に学ぶ表現作法一統 大学生のためのレポート・小論文の書き方』明石書店 2005年4月(1刷)

「よく読む」ことは「よく書ける」ことだという理念に基づき, 別役実「鳥は鳥であるか」や金関丈夫「木馬と石牛」, ミシェル・フーコー「研究内容と計画」などを題材にして, 内容の読解に加え, 文章の構造分析し, 文のスタイルを学ぶ。

- ・二通信子ほか『日本語力をつける文章読本 知的探検の新書30冊』東京大学出版会 2017年1月(2刷)

詩や, 日本語関連, 江戸文化, 書評などから読む楽しみを味わい, 若者文化やエネルギー問題などの現在の日本を取り巻く話題, 心理学や哲学などの学問知識を深める本を紹介。「クリティカルに読む」の章では論理的思考力を必要とする書籍をとり上げて解説を施す。

⑤実践用

- ・資格試験研究会『大卒警察官 合格論文はこう書く』実務教育出版 2015年4月

大卒警察官試験の論作文の出題傾向を分析し, そのねらいや作成の手順, ポイントを解説する。

- ・協同教育研究会『埼玉県・さいたま市の論作文・面接過去問』協同出版 2017年4月

教員採用試験の過去問を分析し, そのねらいや作成の手順, ポイントを解説する。

5 授業のデザイン

以上のタイプの教材を組み合わせる学習効果を上げるためには, 次のような手順が考えられよう。

ステップ1 作文と論文, 感想文と書評, データの整理とその分析など, 文章を書く目的別のスタイルの違いを認識させる。

ステップ2 文の構造を理解させる。主語と述語の対応, 文のねじれの認識, わかりやすい表現や語順・句読点の付け方など。

ステップ3 書く内容を整理する。適切な題材の選定な

ど。

ステップ4 論理的思考力を習得させる。問いの発見, 批判的思考力, ロジックの組み立て方など。

ステップ5 演習。推敲の方法。相互批判と反省など。

ステップ1.2の教材として有用なのは, 前章①である。ステップ3では②, ステップ4では③が活用できよう。

そこで, 「文章表現法」の授業の位置づけを明確にする必要がある。アカデミックスキルとして, 論理的思考力を身につけて, さらにそれを文章で表現するということをねらいにするならば, 論理的思考を巡らせる楽しさを引き出す授業内容と教材選びが必要になろう。「文章表現法」に関する科目を初年次教育の科目として位置付ける大学も多い。

しかしながら, その力を育むためには, まずは基礎的な文章表現のマナーを習得することが前提となろう。

例えば, 桜美林大学の「文章表現」のシラバス(2017年度)によると, 15週中, 9週までが文章の基礎や「作文」の書き方の指導で, 10週目から3回にわたって「論文の基本」について学ぶことになっている。日本大学「文章表現法」のシラバス(2017年度)では, 15週のうち, 「論理的な文章」を扱うのは10.11週の2回。神奈川大学「文章表現法」(2017年度)では第11週に論文・レポート作成のための文章構成・章立ての作り方を学び, 以降, 序論の書き方, 本論の書き方, 結論の書き方にそれぞれ1回を割り当てている。

一方, 専修大学「日本語文章表現」のシラバス(2017年度)によると, 前期では「理由・定理・区分・定義・根拠」の表現を学び, 後期では「対比・同意・反論・演繹と帰納」の論じ方を学ぶ。

理想的な授業デザインは, 前期で文章表現の基礎を学び, 後期に論理的思考について学ばせるという, 基礎から応用に展開するカリキュラムに基づいて構成されるべきであろう。

例えば, 教材の①に挙げた『大学生のための日本語表現実践ノート 改訂版』(風間書房)は, 書き込み式であるため, 修得度が学生だけでなく, 教員にもわかりやすい。誤用の例も的確であり, 教養としての国語力も身につく。③に挙げた居駒永幸ほか『レポート論文のStart Line』(おうふう)では, その発展として, ものの考え方や, 論理的思考とその表現法を学ぶことができる。こうした教材を組み合わせ, 副教材として, ④の二通信子ほか『日本語力をつける文章読本 知的探検の新書30

冊] (東京大学出版会) を採り上げると、初年度教育にふさわしく、またアカデミックスキルを学ぶ機会にもなるろう。

## 6 文章の添削法

さらに、文章表現力を身に付けるためには、ステップ5の「演習・推敲・相互批判」にどれだけ時間を使えるかがポイントになる。題材を絞り、論理の運びを整えるためのチェックシートを作成し、書き方の手順に従って、実際に書いてみるのが重要であり、また自身の文章の欠点を見出すための推敲用チェックシートも活用すべきである。本来であれば教員による文章添削が望ましいところであるが、時間的な制約があり、数度のチェックだけでは文章力は習得しにくいだろう。

チェックシートの作成やそのチェック法として、学生が相互にチェックをするピアカウンセリングがあるが、さらに進めて、学生によるチューター制を導入する大学もある。

佐渡島沙織ほか「文章チュータリングの理念と実践」<sup>注2</sup>は、早稲田大学に2004年、英語のライティング指導を目的として発足したライティングセンターが、日本語文章の指導を行うようになり、現在は分室を持つに至った経緯と、運営の方法などがまとめられている。

センターは「書き手のオーナーシップを護る」という理念のもとに、書かれた文章を添削するのではなく、会話によって当人が何を書きたいかを引きだし、「書き手を育てる」ことをねらいとする。したがって、チューターは特定の分野の専門家である必要はないために、現在は早稲田大学の大学院生が担当している。著書には実践例が会話体で掲載されている。チューターは、書き手の考えを確認しながら、指導でなく、提案というかたちで会話を進めていく。書き手が読み手を意識することにより、文章は磨かれていく。そのプロセスにチューターを介在させ、書き手が納得するかたちで文章が修正されるために、書き手は成長するのである。

中教審答申「学士課程教育の構築に向けて 6」(2008年)、および「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて 7」(2012年)の指針には、主体的な学習者の育成が期待されている。そのために、アクティブ・ラーニングの手法が注目される。この学習法はSDL「自己主導型学習」(Self Directed Learning)と呼ばれる。

そこでこの学習法の概要を次に記しておく。

○講義においては、質疑応答、学生主体の選択学習、ベ

ア・グループによるディスカッション(学生同士、教員対学生)を導入し、意欲を高め、協調関係の上に学習を行う。

○演習においては、グループワークに重点を置き、討議、説明、理解、集成、相談のプロセスを踏むことで、スキルの向上を目指す<sup>注3</sup>。

文章力を向上させるためには、学生自身が自律的に取り組む方法を模索すべきであろう。そのきっかけとして、ピアチェックは極めて有効だと考える。

そのためには、学生のプライバシーに配慮するといった事前指導も必要だろうし、課題に応じたきめ細かなチェックシートの作成も求められよう。

## 7 まとめ

大学での文章表現の授業は、単に読み書きの基礎を習得させるだけじゃねらいではない。「考える力・表現する力」を育成すべくカリキュラムを構築する必要があると考える。

文章をチェックし、誤字や誤用を指摘するといった対処療法的な指導にとどまらず、さらにアカデミックライティングの技法を習得させるべく、教材の選択や授業のデザインにさらに工夫を重ねるべきであろう。

注1 「大学生の文章に見る問題点の分類と文章表現能力育成の指標づくりの試み—ライティングのプロセスにおける協働学習の活用へむけて」(「京都大学高等教育研究」16号 2010年12月)

注2 「文章チュータリングの理念と実践」(ひつじ書房 2013年3月 1刷)

注3 参考 松山雄三「一般教育研究02—第65回東北・北海道地区大学等 高等・共通教育研究会—」(東北薬科大学一般教育関係論集 92号 2015年3月)

(うずまき めぐみ/文学部日本文学科非常勤講師)